

ヒヨコのわき道

ほら、君もこっちに いらっしゃい

第28回 深い海の底から。君もこっちにいらっしゃ〜い？

「海に潜るということ」

ヒトはどれくらい深く海に潜ることができるのでしょうか？

全くの素潜りで漁をする人々などは、十分な訓練の上で、20～30メートルも潜ることができるそうです。でも一般に、それ以上の深さでは潜水具一式が必要です。ただし、潜水具を付けても通常は40メートルが限界なのです。30メートルを越える辺りから酒に酔ったような症状が現れ、この「窒素酔い」と呼ばれる現象は、正常な判断力を奪う恐ろしい現象です。更に、深みから急激に浮上すると、血液に溶け込んだ窒素ガスが血管内で発泡し、血管を塞いでしまう「減圧症」も発生します。空気を呼吸して生きている私達ヒトは、深い海に潜るには全く不向きなのです。

でも、海の本当の深さは何十メートルどころではありません。

通常、200メートルより深いところを「深海」と呼んでいます。場所によっては6000メートルを越える深さの場所もあります。え？そんなに深いところは余程特別な場所だろうって？海の深さを世界中でならして平均値を取ってみると、なんと3700メートルもあるんだそうです。海は地球の表面の70%を占めていますが、深海は、その海の体積の90%以上を占めているのです。

これじゃあ生身の人間の潜水なんて、顔だけ海水に漬けたのと大して変わりませんよね。

「それでももっと深くへ」

ならばどうするか？生身の人間が深海に挑むためには、頑丈な鋼鉄製の潜水艇を使うことになります。そのようなことが可能になったのは、モチロン最近の事です。

ヒトをカプセルに閉じ込めて沈めるだけの、無動力の潜水が行われたのが1928年頃で、深さ900メートルを越えたそうです。それまで深海の様子を知りたいければ、長い底引き網でも使うしかなかったのですから、これは快挙。でもまだ100年経っていませんね。現在では深さ6000メートルを越えて潜れる潜水艇も開発されています。

また、無人の潜水艇も開発され、深海の底を撮影したり、生き物を採取したり、船上から行う海底の掘削調査とあわせて、深海底にあると考えられる資源の調査も行われています。

「潜水艇でわかったこと？」

さて、深海の調査で明らかになったのは、そこには様々な、奇妙な生き物が居るということです。「深海魚」なんて言い方もありますが、珍しい生き物は魚だけではありません。熱水鉱床については以前取り上げていますから（第7回 隣人を探せ？ 氷結した星の海原）、今回は別のお話しをしましょう。

「餌が少ない。」

深海では、深さ1000メートルほどまでは、かろうじて光が届きますが、光合成は行うことが出来ないのです。平均すると生物の密度は高くありません。つまり、魚にとっては餌が乏しいと。しかし、広大な深海を、餌を探して泳ぎ回るのも不利です。ならば、「動くものが近くにきたら確実に察知して、とにかく飲み込んでしまえ」という戦略が考えられます。

このような環境では、身体の割に大きな眼球や、大きく開く巨大な顎を持つ魚が生息しています。

大きな顎で有名なのはフウセンウナギです（属名はSaccopharynx: サッコ（袋のような）ファリンクス（のど）と言う意味です）。その姿は「全身が顎と袋状の喉」とでも言えばよいのでしょうか？とにかく奇妙な形態です。

また、フクロウナギ（Eurypharynx: 広いのどの意味）も負けていません。身体が縦に裂けたのではないかと思うような巨大な顎の先端に、小さな頭部がちょこんと乗っています。

「デメニギスさん。あなた、何者？」

巨大な眼球の一例をあげれば、デメニギスが印象的です。何しろこの魚、丸みのある頭部が透明になっていて、そこに透けて見える緑色の巨大な両眼が鎮座しているのです。しかもこの眼球、上からやって来る光を捉えるため、真上を見つめる角度で付いているのです。頭だけ見たら、宇宙怪獣と勘違いしそうです。いや、こんな斬新なデザインの怪獣は、テレビや映画のフィクションには出てこなかったと思います。人間にはちょっと思いつけないかと。

「出会いが少ない。」

さてさて、餌が少ないけれど、活発に探しに行くわけにもいかないジレンマに加えて、これでは繁殖の相手がなかなか見つからない、という問題もあります。

その対策として極めて奇妙な方法をとったのがチョウチンアンコウの仲間でしょう。

体長40cmを超え、丸みのある独特の体型は、身体の半分近くが頭骨で占められていて、頭の上の発光器で獲物呼び寄せ、大きな顎でパックリ。冬はお鍋が美味しく、あん肝は珍味。

でもこの姿、すべてメスのアンコウなのです。オスは成熟しても非常に小さく、メスの10分の1以下しかない種類もあります。

しかも、オスはたまたまめぐり合えた貴重なメスを決して逃しません、いや、メスが逃がさないのかなあ？

「だから、あなたとずっと一緒。」

その小さなオスはメスの腹部に喰らえ付き、決して離れません。一見オスが強引に迫っているようにも見えますが、それだけではないんです。やがて噛み付いたオスの頭部がメスの腹に融合してしまい、血管までつながって、オスは餌をとる必要がなくなり、オスの身体はメスの一部と化してしまうのです。これでひと安心、繁殖相手を探し回る必要はありませんが、奇妙な解決方法には変わりありません。



「波打ち際の子供たち？」

深海の奇妙な生き物達について述べようと思えば、まったくキリがありません。でもそれらは、世界に限られた数しかない潜水艇の調査などで明らかになった情報です。

これでは広大な深海を、針でつついて調べているようなもの。深海は、まだ私たちの知らない、遠い世界なのでしょう。

万有引力を発見したニュートン大先生が、かつてニュートン力学の体系を確立した時、周囲の研究者には、「物理学にはもう謎は無い」なんて言うヒトも居たそうです。

でもニュートン大先生は言いました。「自分は真理という大海の波打ち際で、小さな発見を喜んでいる子供のようなものだ」と。

まさにその通り。水面で毎日騒いでいる私たちの遥か下。海は、深遠な謎をたたえて、いまだ沈黙を守っているのです。